



第5学年1組 国語科（論理国語）批評理論に基づいて 文学作品の批評文を書く

勝部, 尚樹

(Citation)

研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集, 8(別冊 : 授業実践報告集):14-20

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488510>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488510>



第5学年1組 国語科(論理国語) 批評理論に基づいて文学作品の批評文を書く

指導者 勝部 尚樹

日時 2024年2月11日(日) 公開授業(14:20~15:10)

場所 5年1組教室

1 単元の設定にあたって

(1) 生徒について(「意識調査をもとに」)

単元実施に先立ち行った事前調査をもとに、生徒の意識の現状とそこから導き出される課題について述べる。

「論理国語」では後述するように「読むこと」の教材として文学作品を扱うことはないが、本単元では「書くこと」の対象として小説を扱う。生徒の多くは授業で小説を読むことに対して好意的な考えを持っている(①)。特に、もともと小説を読むことが好きであるとは答えていない生徒も授業で小説を読むことが好きだと答えている(①②)。その理由としては、授業で細かい描写や表現に注目しながら小説を論理的に解釈する点、一義的な解釈ではなく読み手の多義的な解釈が許容される点、さらにそういった読み方が教室で他者と共に読み、討論することで可能となる点があげられる(②)。

「論理国語」の枠組みでいかに文学作品を用いることができるかを模索したい。さらに、ペアワークや小集団学習、全体での討議など、生徒同士で学び合う場面も多く作り(④)、思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む態度を育成したい。

一方で、小説に比して評論を読むことに対しては後ろ向きの意見が見られる(③)。今年度扱っている大学入試レベルの評論で抽象度が上がることで内容を理解しづらいことが要因である。小説の批評として評論文を読む際は、評論の内容を作品と結びつけながら理解していくことが求められる。

<アンケート結果> (2024年1月23日/対象:5年1組/生徒数:39人[回答数33人])

① 授業で小説を読むことは好きですか

Aとても好きである:4人 Bまあまあ好きである:21人 Cあまり好きではない:7人 D好きではない:1人

理由B「普段サラッと流してしまう表現などを時間をかけて読むことができるから」「小説について小集団などで周りの人と解釈の共有などが出来るので、意見交換が好きだから」「事実だけを淡々と述べられる学校の授業業界において、小説はファンタスティックなのでオアシスである」、C「自分の興味のある分野に関係なく全員で読まされるから」

② 授業やテスト以外で、小説を読むことは好きですか

Aとても好きである:5人 Bまあまあ好きである:13人 Cあまり好きではない:10人 D好きではない:5人

③ 授業で評論を読むことは好きですか

Aとても好きである:2人 Bまあまあ好きである:14人 Cあまり好きではない:14人 D好きではない:3人

理由C「理解することが難しいため」「専門的な内容が多く、読んでいて身近に感じられないから」

④ 生徒が学び合える授業だったと感じますか

Aとてもそう思う:18人 Bまあまあそう思う:11人 Cあまりそう思わない:1人 Dそう思わない:0人

(2) 学習方法について

本単元では「書くこと」を指導事項として、文学作品について多面的・多角的な視点から自分の読み方を見直したり、本文や資料に基づいた論拠の吟味を重ねたりして、批評文の主張を明確にすることをねらいとする。なお、近年の大学入学共通テストでも芸術作品を論じた評論や小説を論じた批評文が出題されるなど、複数の資料を組み合わせながら作品を批評する力は現在求められている。

本単元実施までには「山月記」を扱い、小説を批評的に解釈するとはどういうことかを考えた。本単元では批評文作成の導入として第1次にマンガを論じた永井均「マンガの哲学」を読み、作品批評の意義を考える。次に大塚英志「ストーリーメーカー」をもとに「行きて帰りし物語」構造の事例を身近な作品(小説、映画、マンガ、アニメ等)から探して報告文を書き、作品批評の一形式を学ぶ。

第2次は永井龍男「胡桃割り」を扱う。初読時には「鳥瞰図(作品をA4用紙1枚に簡潔にまとめ

た図)」を書くことで大まかなあらすじをつかむ。さらに初読時の感想に加えて「一文批評(「この作品は[…(である)]と分析した」の定型文)」を書くことで、初読時の分析を表出する(この定型文を用いることで「〇〇が△△する物語」のような要約レベルではなく、分析レベルで解釈する)。

次時では本文の内容を理解した後、批評理論に基づいて作品を分析する。分析の際は異なる理論や観点を統合して批評するために、ジグソー法を用いる。エキスパート活動では「作家論」「テキスト論」「読者論」「ジェンダー批評」の4つの立場に分かれてそれぞれの理論を説明した資料を読み、各理論に基づいた「一文批評」を書く(なお、生徒は以前の単元でジェンダー論がテーマの学習をしている)。ジグソー活動では各理論の「一文批評」を比較・統合して、小集団で新たに「一文批評」を作り、全体で共有する。この活動により、多面的・多角的かつ批判的な視点から自分の読み方を見直したり、本文や資料に基づいた論拠を吟味したりことをねらいとする。最後に個人で批評文を書き、相互評価をする。

(3) 教材について

令和4年度より全面実施となった高等学校学習指導要領(平成30年告示)では、旧課程「現代文B」が「論理国語」と「文学国語」に分割される形となった[日本学術会議(2020)]。本校では必修履修は「論理国語」のみで「文学国語」は選択履修(人文・社会科学類型の生徒のみ履修)である。よって半数以上の生徒は5、6年生で文学に触れないことになる。しかし、本校の教科教育目標である論理的・批判的・創造的思考や自立・協同・創造の力を育成するために文学を扱うことは不可欠である。よって本単元では教材として作品批評の評論文や批評理論の解説文などの論理的・実用的な文章を扱い、批評文を「書くこと」を指導事項として、批評の対象を文学作品とする。

本単元で対象とする「胡桃割り ある少年に」は永井龍男(1904~1990)が1948年に発表した作品である。作品全体としては「絵描き」が友人に過去を語る形式で描かれ、母親を早くに失くした少年が父や姉らとの関係を通して自己中心的な世界観を脱却する物語である。短編の中で少年を取り巻くできごとと少年の心情の流れが巧妙に描かれている。平易な文章でありながら「胡桃」「胡桃割り」などの象徴や語りの形式に込められた仕掛け、複数の人物との関係など作品の批評に耐える作品だと考えられる。さらに少年を主人公として亡き母、姉、父の再婚相手と男性中心的に語られる作品であるとも解釈でき、ジェンダー批評(フェミニズム批評)にとって格好の対象となるだろう。よって複数の批評理論から分析する対象として適している。

2 単元の構成

(1) 単元の学習目標

作品の批評文を書く活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 作品について、多面的・多角的な視点から自分の読み方を見直したり、本文や資料に基づいた論拠の吟味を重ねたりして、批評文の主張を明確にすること。(「論理国語」思考力、判断力、表現力等 A書くこと エ)

(2) 単元の位置

本単元は、「発展期」(5・6年)「書くこと」についての単元であり、文章の論理の道筋をたどりながら多角的に筆者の主張や作品の構造を読み解き、自分の考えを深める単元である。また、複数の批評理論の内容を論理的・多元的・批判的にとらえ、視点や観点を整理しながら再構成することによって情報を統合し、ものの見方や感じ方を形成することができるという教科目標につながる。

(3) 単元のねらい

① 作品を多面的・多角的に精査する上で、論理的・多元的、批判的にとらえ、批評文を書く活動を通して視点や観点を整理しながら再構成することによって情報を統合することで、ものの見方や感じ方を形成する力を育成することをねらいとする。

②資質・能力育成の重点

(学習指導要領の3観点と本校研究主題の資質・能力(3能力4要素)との関係を示す。)

	A 基礎力 (道具や身体を使う)		B 思考力 (深く考える)		C 実践力 (未来を創る)
	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	I 知識・概念	II 技能	III 論理的・批判的・創造的思考	考える力	IV 自立・協同・創造の力
発展期	論理的文章特有の表現や語法を理解し論理の道筋をたどりながら多角的に筆者の主張を読み解き、自分の考えを深めることができる。	メディアの差異を理解し、それぞれのよさを活かして、文章・図表・画像など多様な資料や情報を多面的・多角的に収集し、複数の資料を精査し統合的に活用できる。	様々な情報を多面的・多角的に精査する上で、論理的・多元的・批判的にとらえ、視点や観点を整理しながら再構成することによって情報を統合し、ものの見方や感じ方を形成することができる。	情報を重要度、信頼度によって分類整理し、多角的に分析、考察、吟味したうえで自ら課題を設定して言語表現を行うことができる。	国際的視野や地球規模の視点を持ち、自分や社会の未来を切り拓こうとする態度を身につける。

(4) 単元の展開と評価 (全8時間)

時	各時の主題	各時の教材と主な活動	各時のねらい(評価の場面)	評価の観点
前単元	「山月記」を批判的に解釈する	教材：中島敦「山月記」、千野帽子「人はなぜ物語を求めるのか」 活動：作品を読んで批評文を書く	小説を批判的に読むとはどういうことかを考える。	評価の観点
第1次 1時	作品の批評文を読む	教材：永井均「マンガの哲学」 活動：マンガについて論じられた文章を読んで内容をまとめる。	「このマンガのほんとうのおもしろさ」をまとめることができる。	II
2時	「行きて帰りし物語」報告文を書く	教材：大塚英志「ストーリーメーカー」 活動：「行きて帰りし物語」の例を探して報告文を書き、相互評価をする。	事例を探して序論・本論・結論の形式で報告文を書くことができる。	III
第2次 1時	「胡桃割り」を読む	教材：永井龍男「胡桃割り」 活動：作品を読んで鳥瞰図(作品を図式的にまとめた図)を作成する。	作品内容を図式化することで作品のおおまかなあらすじを捉えることができる。	IV
2時	「胡桃割り」を読解する	教材：永井龍男「胡桃割り」 活動：問題形式のプリントを用いて小集団で本文を読解する。	叙述に着目しながら作品の内容を理解することができる。	I
3時	批評理論を読む	教材：小林真大『「感想文」から「文学批評」へ』 活動：エキスパート活動 ①「作家論」「テキスト論」「ジェンダー批評」「読者論」の4つの立場を設定する。 ②小集団内で役割を決め、4つの立場ごとのエキスパートグループに分かれる。 ③各立場に基づいて、本文からの根拠をもとに、一文批評の形でまとめる	批評理論の文章を読み、自分の担当する理論に基づいて作品を批評することができる。	III
4時 (本時)	「胡桃割り」を批評する	活動：ジグソー活動 ①4つの立場をもとに、組み合わせて、作品批評をする。一文批評の形でまとめる。 ②一文批評をミニホワイトボードに書く。 ③全体で共有する。 ④個人でふりかえりを書く。	複数の批評理論による分析を吟味することで、批評文作成のための視点を持つことができる。	考える力
5時	「胡桃割り」批評文を書く	教材：小林真大『文学のトリセツ「桃太郎」で文学がわかる!』 活動：個人で批評文を書く	前時までの学習をふまえて、根拠のある批評文を書くことができる。	III
6時	批評文の相互評価	活動：批評文を相互評価する	作品批評の意義についての考えを形成することができる。	IV

(5) 評価の観点

I 知識・概念 II 技能 III 論理的・批判的・創造的思考 考える力 IV 自立・協同・創造の力

3 本時の学習 (2次4時)

(1) 本時の主題 批評理論に基づいて文学作品を分析する

(2) 本時のねらい

①複数の批評理論による分析を吟味することで、批評文作成のための視点を持つことができる。

②資質・能力育成の重点

（学習指導要領の3観点と本校研究主題の資質・能力（3能力4要素）との関係を示す。）

A 基礎力 （道具や身体を使う）		B 思考力 （深く考える）	C 実践力 （未来を創る）
知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
I 知識・概念	II 技能	III 論理的・批判的・創造的思考	IV 自立・協同・創造の力
批評理論に基づいて作品を多面的・多角的に分析し、その分析を他者とともに考察・吟味したうえで、根拠に基づいて整理・統合する力を養う。			

(3) 教材について・方法について

本時では「胡桃割り」の批評文を書くために作品を多面的・多角的な視点から分析する手段としてジグソー法を用いる。小集団の中で役割を指定して批評理論の立場に分かれる。エキスパート活動では作家論・テキスト論・ジェンダー批評・読者論の立場を設定して、それぞれに批評理論の資料〔出典：小林（2021）〕を配布する。エキスパート活動では立場に基づいた一文批評を根拠とともに作成する。各エキスパートが再び集まったジグソーグループ（もとの小集団）でそれらの一文批評を比較・統合して、新たな一文批評を作成し、ホワイトボードに書く。最後に全体でも共有する。複数の批評理論による分析を吟味することで、批評文作成のための視点を持つことができるようにしたい。

(4) 本時の展開

学習の流れ、生徒の活動、指導上の留意点・評価

時	学習の流れ	生徒の活動	指導上の留意点・評価
0	○本時の流れの確認 ○エキスパート活動のまとめ	○エキスパート活動（4、5人グループ）に分かれて、自分の立場に基づいた批評文をまとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">《立場》作家論・テキスト論・ジェンダー批評・読者論</div>	○スライドで本時の流れを説明する。 ○エキスパート活動の座席にする。 ○「一文批評」の形でまとめるように指示をする。
10	○ジグソー活動	○元の小集団（4人グループ）に戻る。 ○それぞれの立場からの分析結果を共有する。 ○ワークシートにメモを取る。 ○各理論の批評を比較・吟味して、小集団で新たに一文批評を作成する。 ○ホワイトボードに記入して黒板に掲示する。	○欠席生徒がいるグループは役割が重ならないように調整してできるだけ4人のグループをつくる。 ○一文批評の根拠も考えさせる。
30	○全体討議 ○論点整理	○数グループが発表する。 ○指導者による論点整理も参考に、論点を整理する。	○発表者はその一文批評に至った経緯を含めて発表させる。
40	まとめ	○本時の授業のふり返りを行う。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">（評価）：評価資料（ワークシート） 複数の批評理論による分析を吟味することで、批評文作成のための視点を持つことができる。（考える力）</div>

(5) 評価の目安

考える力：複数の批評理論による分析を吟味することで批評文作成のための視点を持つことができる。

A（十分に満足できる）	B（おおむね満足できる）
批評理論の役割を十分に理解し、複数の批評理論を批判的に捉えたうえで検討し、根拠に基づいた一文批評を書くことができる。	批評理論の役割を理解し、複数の批評理論を検討し、一文批評を書くことができる。

【参考資料】

- ・石原千秋ほか（1991）『読むための理論—文学・思想・批評』世織書房
- ・日本学術会議 言語・文学委員会、古典文化と言語分科会（2020）『提言 高校国語教育の改善に向けて』<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t290-7.pdf>（2024年1月31日閲覧）
- ・小林真大（2020）『文学のトリセツ 「桃太郎」で文学がわかる！』五月書房新社
- ・小林真大（2021）『「感想文」から「文学批評」へ 高校・大学から始める批評入門』小鳥遊書房
- ・疋田雅昭（2021）『文学理論入門—論理と国語と文学と』ひつじ書房

4 授業記録

(1) 学習過程

第2次1時では初読のあと鳥瞰図(図1)を作成した。生徒の多くは初読の段階で「胡桃」が「僕」の変化・成長の象徴であることに触れていた。

2時で「僕」の心情の変化を読解したあと、3時のエキスパート活動では批評理論の資料をもとに一文批評を考えた。「作家論」(伝記的批評)の班は作者(永井龍男)の生い立ちを調べて作品とつなげていく作業

であるため比較的取り組みやすいようであった。「テキスト論」の班は普段の授業で行っている読解に近い作業で、象徴表現や描写に着目させながらテキストに基づいた批評を書くように助言した。他の立場と質が異なる「ジェンダー批評」の班は最も取り組みにくいようで、適宜ヒントを与えることでジェンダー(今回はフェミニズム)の視点から作品を批評・批判することを促した。「読者論」(一般的な読者論とは異なり読者の印象をもとに論じる)の班には読者目線で独自の解釈を創造するように促した。

4時(本時)のジグソー活動では4つの理論による一文批評を比較・吟味して小集団で新たな一文批評を作成し、共有した(図2、3)。

5時ではこれまでの学習をもとに「胡桃割り」を読んだ人に対して、新たな読み方を提示する批評文を、批評理論を使って書こう」と課題を出した。批評文例として「脱構築批評」「フェミニズム批評」「精神分析批評」を紹介した。生徒には任意の批評理論を用いて作品を分析するように伝えた。作成にはパソコンを用いて、提出された作品はその次の時間に回し読みをして相互評価をした(Googleドライブを共有して級友の作品が読めるようにした)。

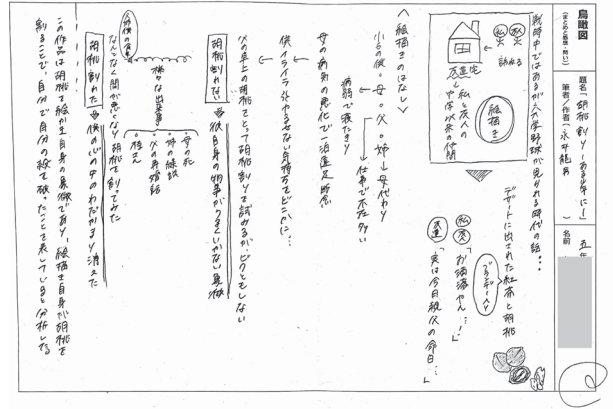


図1 鳥瞰図



図2 生徒のジグソー活動の様子

(2) 授業分析 (評価について)

① 4時(本時)の分析

生徒は非常に意欲的に授業に取り組み、活発な議論が行われた。特に読者論が提示した奇抜な解釈に対して、それを批判したり根拠づけたりしようとする姿勢が見られた。

また批評理論の意義について自覚的なコメントも見られた。複数の批評理論による分析を吟味することで、批評文作成のための視点を持つというねらいはある程度達成できたと考えられる。

《生徒のふりかえり(ワークシート記述)より》

- ・同じ一つの物語でも批評する観点によって全く違った物語になると感じられてとても面白かった。
- ・作品を批判することは作品を見る時の新しい視点を見つけることにつながる。
- ・作家論は直感的に納得しやすいため間違いに気づきにくいと感じ、ある意味危険だと思いました。
- ・読者論が、意味がわからないのに妙に説得力があるのはなぜか。

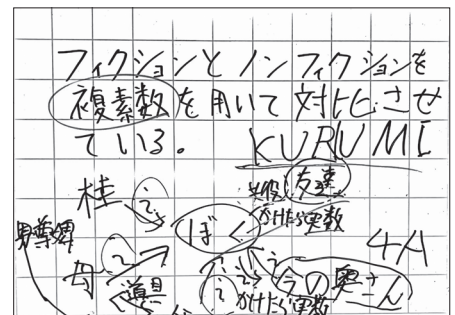
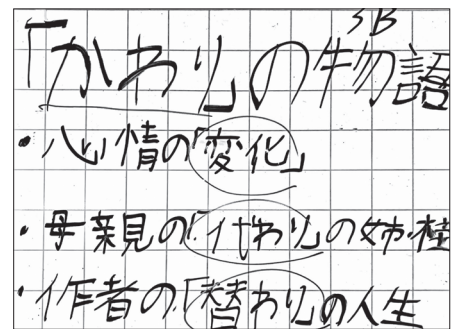


図3 共有された一文批評

- ・いろいろな批評理論によって作者が意図していなかったであろう部分まで話を広げることができるのが面白いと感じた。
- ・「ナット(胡桃)」の意味など一見なくても良さそうな表現に注目すると良いとわかった。

②5時(次時)の分析と評価(総括的評価)

5時「批評文を書く」で書いた批評文は次の評価規準で評価をした。

(観点 i) 「胡桃割り」の本文を引用しながら論じている

(観点 ii) 根拠のある新たな「読み」の提示になっている

《生徒作品より 評価 A の例》

この批評文は本文を引用しながら(観点 i)、根拠付けも明確で、作品を読んだ人にとっての新たな読みとなっているため(観点 ii)、評価 A とした。

この作品は「家族関係の再確認を題材にした作品である」と分析した。(中略)

また、ジェンダー批評の観点からは、本作品における女性の登場人物に対する描写はかなり少なく、その証拠に母の台詞等は一切出てこない。また、節雄が胡桃を割るのは「父の命日」であることから、父と息子の関係性を主要に描いているように考えられる。しかしながら、節雄の成長のきっかけやそれぞれの胡桃を割るといふ描写の際に作用するのは姉であり、母であり、桂さんなのである。描写が少ないとはいえ、この3人の人物が節雄の物語にとって大きな存在であることに変わりはない。

よって、本作品の大きなテーマは「父と息子」だけではなく、桂さんを含む家族全体の関係性であると考えられる。

従って、「胡桃を割る」という動作そのものが説明しているのは、節雄が自らの家族関係を見直し、それぞれが亡くなったり嫁いだりして離れ離れになっていく過程での家族としてのつながりを再確認していることではないかという結論に至った。彼が毎年父の命日に胡桃を割っているのも、それまでの家族関係や父、母、姉、桂さんとのつながりを思い起こし、「再確認」しているのではないだろうか。

《生徒作品より 評価 B の例》

この批評文は本文を引用しながら論じているものの(観点 i)、根拠と主張との関係が明確ではないため(観点 ii)、評価 B とした。

(前略) この文章の前半には絵描きが「洒落ているということもないが、一実は、今日は親父の命日だね」と言うところから始まる。つまり親父の命日にまつわる胡桃割りの物の始まりだと言うことだ。「カチンと、快い音がして、胡桃は二つに綺麗に割れた。思いがけない、胸のすくむような感触であった。」と本文中の表現から胡桃が割れたことによって、少年(絵描き)の心の中のわだかまりが解消されたことを表していると考えた。つまり、胡桃は僕自身の象徴である。そして本文の最後に「私の割る音とは違うのだ」という表現から絵描きにとって胡桃が割れる音はその人の人生を表しているようなものだと考えていることが読み取られる。そして、なぜ筆者が自身の背景を文章に組み込んだのか、それを考えるとやはり自身の願望(伝えたいこと)を胡桃割りや絵描きの人生を踏まえて表現したのだと考えることができる。

以上のことから、私はこの文章は「筆者自身の願望を胡桃に例えて表現した作品」と捉えた。

③生徒のふりかえりの分析

単元末のふりかえりフォームにおいて、初読時(鳥瞰図)に書いた一文批評と単元末(批評文)に書いた一文批評を比較した。以下は生徒 a ~ d の4名の記述である。

	初読時	単元末
a	胡桃を主人公の心情として、その変化を表した小説である。	作者の幼少期の経験や思いを、心情の象徴である胡桃を通して描いたものである
b	この作品は、「胡桃」を僕のアイデンティティとして書いていると分析した。	この作品は、「胡桃」を現実と理想の境界線として、作者本人の願望を表現した物語である。
c	この作品は「思春期特有の行動の迷いとそれを断ち切る過程を胡桃割りに喩えた物語」と分析した。	この作品は「失われない愛情への気付きの過程を表現した」と分析した。
d	少年の成長と思い出の継承を行う作品	家族の損失を代替する父と息子の物語

おおむね、初読の一文批評と比べて変化が現れており、批評理論の視点に基づいて自分の読み方を再構成した批評文になっている。

まず本作品が作者(永井龍男)の生涯と結びつけやすかったためaのような作家論的な批評が多かった。aの生徒は「正直あまり物語文は好きでなかったけれど、ほかの読み方、特に作家論を通して物語を読んだときに様々な考え方があってという事が分かり、分析することが楽しいと感じるようになった」と述べている。またbも同じく作家論だがテキスト論による読みも反映されており、より深い読みになっていると考えられる。本人のふりかえり「授業前は、「胡桃が割れた時は絵描きの殻が破れた時、つまり成長した時だ!」と勝手に思い込んでいたが、どうやらそれだけが正解ではないようだというのが授業を通してわかった。初めに読んだ時は特に何も思わず読み進めたが、グループワークを通して「なぜ初めに野球のシーンがあるのだろうか」「この私と友達の存在は必要なのか?」といった疑問が次々と湧いてきた。」からは批評理論を用いて批評文を読むことによる変容が読み取れる。またcは初読時においても深い読みをしているが、本人が「読者論の影響を強く受けて、自由な発想で広がる世界と辻褃合わせを楽しむようになった。」とふりかえっているように、より創造的な読みができるようになったと言えるだろう。dは「ジェンダー批評を学んだことで、これまでジェンダーの問題を感じていなかったこの作品を、父に惹かれていく画家(主人公)という新しい構図から物語を捉えるようになった」とふりかえっており、ジェンダー批評という新たな読み方を知ってこそ分析できた批評である。

(3) 成果と課題(研究協議・指導助言から)

本授業では複数の批評理論を用いて文学作品を批評する試みで、授業を通して読みを深め、本文や資料に基づいた説得力のある批評文を書くことができたと考えられる。

一方、批評理論の選定、批評の対象としての作品選定には課題が見られた。ある生徒は「初め読んだときは文学的ですごい作品だなと思ったのですが、読者論の視点から分析するとあまり面白くないことがわかったし、テキスト論、ジェンダー論(による見方)もあまり肯定的でないと分かった」と述べていた。批評理論の扱い方については今後も模索したい。

授業後の研究協議では以下のような意見が出た。

- ・議論や発表がしやすい雰囲気の中、主体的に思考し探究する生徒の姿が見られた。
- ・授業が終わっても議論をしている生徒や、他クラスの生徒に授業内容を報告している生徒もいた。
- ・他者の意見に対して批判的に意見を述べたり、根拠を問おうとしたりする姿勢がよかった。
- ・批評を一文にまとめるというハードルの高い課題だからこそ、深い学びとなっていた。
- ・単元の間でどのような力を身に付けてきたのか、その繋がりが見えにくかった。
- ・今回の読者論における「勝手の読み」はどのように扱うのか。

また指導助言の目黒先生からは、今回は文学の読み方、学び方についての探究的な授業であったとしたうえで、文学における「論理」の捉え方(比喩表現の飛躍など)、「分析」(誰がやっても同じ方法)と「批評」(論者にとって異なる)の違い、批評理論の扱い方(ジェンダー批評は分析するアプローチの方に焦点を当てた理論で、他の3つは分析対象に焦点を当てた理論)、先行研究の扱い(引用の方法)、批評文の目的と対象について指導いただいた。さらに教材選びの可能性として小学校教材(重松清「カレーライス」など)を対象に高校生が批評するという活動も提案された。また「ある班の虚数「i」という語をもとに解釈していたのは一見奇抜だが、ラカンの精神分析にも登場する語である。実は高校の評論文とつなげて深められる可能性もあるかもしれない。」と指摘された。

今後も論理と文学、文学と批評について授業研究を続けていきたい。